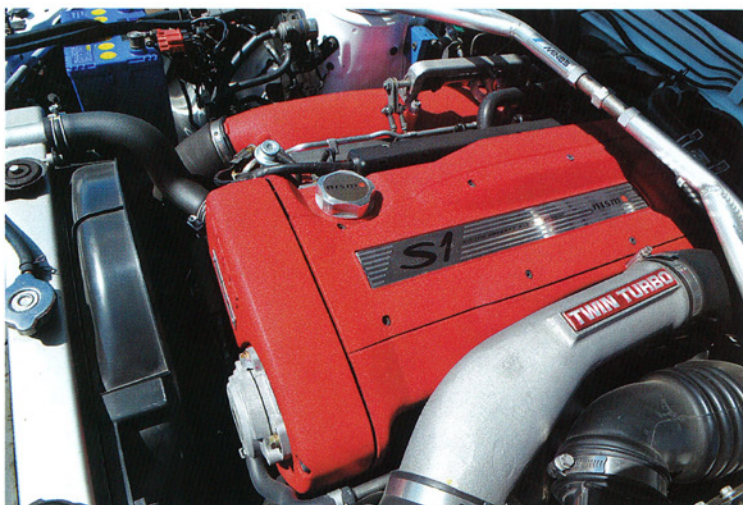


RB26DET専用エンジンオイル 仕様確定



3年前、山本はニューテックの鳩谷和春代表に、「GT-R専用の最高級オイルを作っていたきたい」と熱く語った。だが、鳩谷代表からすぐに良い返事はもらえなかった。なぜなら、「既存の最高級品が持つ性能を凌駕してほしい」という極めて困難な要求だったからだ。鳩谷代表は苦悩したに違いない。「何としても山本の思いを形にしたい。だが、そう簡単にはいかない」と。

©ニューテック ☎045・628・2055 <http://www.nutec-japan.com>
文:山本浩伸(本誌)/中山智和(マインズ) 写真:大西 靖/宮本賢次(本誌)



優しいエンジンの鼓動で
皮膜形成の完了を実感!

「GT-R紀行で北海道へ行きます。すでに試作品を注入したR34GT-Rニル号の走行距離は3000kmを超え、R32VスベII号については出発前日にオイルを交換します。おそらく、2000km強を走ることになるでしょう。普段通りの運転でテストを重ねてきます」と山本は、鳩谷代表にテスト方針を告げる。

「今回用意した試作品で、間違いなく山本さんから合格を頂けると思いますが。とにかく、ガンガン走ってみてください。そして、少しでも不満を感じたら、教えてください。何度でも改良します」と鳩谷代表は言う。さて、一気に製品化に漕ぎ着けるか? もし、山本が納得できなければさらなる改良を行うため、予定している発売日から大幅に遅れる可能性がある。だが、山本にとってGT-R専用オイルの誕生は、最大の夢である。徹底的にやり遂げたい。

この思いを胸に、嘘偽りのないテスト結果を報告する。なお、テストの公正を期すために、マインズの中山智和に参加してもらった。

R34GT-Rニル号に試作品を注入して300kmを走った段階では目ぼしい変化が見られなかった。ただ何となくだが、エンジンが穏やかに優しく回っているような気がした。それから100km、200kmと距離を延ばしても、何かが変わったという印象はない。

「まさか、失敗?」。結局、北海道へ旅立つまで1000km強を走ったが期待した結果は得られなかった。R34GT-Rニル号の出だしは鈍重だ。これは車両の特性だから、オイルを入れただけで変化を期待す

新オイルが伴侶になる！



ニューテック代表・鳩谷和春氏は語る。「粘度指数は5W40ですが、厳密に言えば40から50の真ん中です。ここが新オイルのこだわりです。また、0Wではタービンの軸受けが熱をもち油膜切れが心配です。これも解消しました」



「走行距離が延びれば、オイル上がりが起こり、燃焼室にカーボンがたまりやすくなります。これを何とかカバーしようとして研究した結果、「5W40～50の真ん中」のような仕様を導き出したのです」と鳩谷代表



第2世代のオーナー諸氏の多くが、なんらかの方法で400ps程度までは改造しているだろう。そんなあなたにとって、新オイルは唯一無二の伴侶になるはずだ！



試しに試作品を触ってみれば、手にしっとりとなじんだ。サラサラだけど、粘り気もたっぷり、手からこぼれない。山本が初めて経験する感触である！

の方が酷だ。

だが北海道陸後、山本は突然鋭くなったエンジンの吹き上がりに驚愕する。アクセルペダルの踏力に対し、間髪をいれずに反応するのだ。エンジン内部のすみずみまで試作品が浸透したのだろうか？ トルクフィールも全然違う。

例えば街中で6速/1800rpm程度でのんびり走っている場面で、突如、クルマの流れが早くなってもシフトダウンせずに、少しアクセルを踏めばその流れに一瞬たりとも遅れない。また、ダラダラと前方を走るクルマを、サッと抜きたいときでも、アクセルペダルの操作一つで楽にまくれる。

シフトアップの際では、回転計の針がスッと6000、7000rpmまで回るので、加速フィールがまるで違う。走りだしの鈍重さが完全に消えていた。だから、アクセルペダルを踏むのが、楽しくて仕方ない。気が付けばバトカーにご用心！という速度域に達しているのだ。

油温、油圧もビタッと一定しているし、何と言っても「エンジンの皮膜とは、こういう感覚のことを指すのか！」と実感できるから不思議だ。さらにだ。走行3000kmを超えても劇的な変化に陰りはない。むしろ、ますます快調になっていく。このオイルは半端じゃない、と呼ばずにはいられなかった。

では、ここから同行した中山の印象をお伝えする。

このたび、GTR紀行に同行し、新しいニューテック製オイルのフィードバックチェックを依頼された。先入観を排除するということから、山本編集長は「とにかく乗ってみて」と言うだけだった。

最初にわたしが運転したのは、純

正エンジンではなくニスモ製を搭載した本誌の至宝、R32VスベII号だ。このクルマも普段からメンテナンスをさせてもらっているもので、状況の変化はすぐに察知できる。山本編集長に遠慮することなく、素直な印象を伝えたい。

まず、エンジン始動直後から「軽い」と感じた。オーバールール後の走行距離はわずか4000kmである。エンジンは新品同様だから、普通ならばまだまだ硬さが残る。だがそれを一切感じない。すぐに、山本編集長にオイル粘度を確認してしまふほど驚いた。

100%化学合成オイルも多種多様だが、肝心なのはベースとなるオイルの品質だ。どうやらこのオイルは、ただ者じゃなさそう。

2000km強を走る中で、エンジンノイズの低減は、距離が伸びていくほど強く感じた。被膜形成とかいうか、エンジン内部がコーティングされている感覚をはっきりと味わえる。

また、湯温、油圧共に絶えず安定しているから、安心して運転に集中できた。

途中、山本編集長と交代してR34GTRニル号に乗り込む。こちらも劇的な変化を感じ取れた。走行感覚がとにかく軽いのだ。オイル一つでこれほど性能が変わるのか？ こんな経験は初めてである。

おまけに、2車ともにボディカラーは白だから、どうしても排気ガス中のカーボンがリヤバンパーに付着してしまふ。だが、それも明らかに減っており、シール効果の賜物だといえる。燃料の完全燃焼、出力の向上、そして、燃料消費量の削減に大きく貢献するオイルだ。

いよいよ次号で販売を開始する。